
虫けらは唄う。

宮下サカナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虫けらは唄う。

【Zコード】

N6169D

【作者名】

宮下サカナ

【あらすじ】

七年前、季節は初夏だった。ある街で誘拐事件が起こった。私はその被害者だ。語るのも吐き気がする程残酷で、そして陳腐なこの物語。七人のオナカマと共に語りましょう。泣かない子供は死んでいる。

雨が降っていた。

血の色の雨だ。

私は頬を地べたに押し付けている。

キスしそうな程近い場所に、妹の顔がある。

意識を失っている。

青白い顔は汚泥に塗れ、服や髪には血の雨が降り注ぐ。

血と泥が混ざる。

汚れた妹が土の上に転がっている。

人形のような肌が冷たくなる。

雨が体温を、命を奪つていく。

弱い灯として淘汰される命は、とても悲しい。

生れつき身体の弱い彼女は、誰よりも衰弱していた。

太陽を知らない肌は、かつてとても美しかったのに、今は老婆のように渴いてくれんでいる。

その骨と皮膚で構成された身体に手を伸ばす。

体温を感じられるのは幸福だ。

どれほど微かでも、それは幸せなことなのだろう。

それは腐りかけたトマトのような感触だった。

でも温かかった。

生きて、と。

生まれて初めて願った。

泣きながら祈りを捧げた。

神様はもう信用できないと思つた。

だから運命に祈つた。

回避できた不幸に殺されるのは馬鹿らしい。

私は信じたかった。

私は、私達は、無力ではないと。

妹の頭を抱きしめて、その軽さにまた絶望しながらも。

信じていた。

自分の内側で悲鳴を上げる何かを、あるいは心を。

愛した男の血を身体中で感じながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6169d/>

虫けらは唄う。

2010年12月28日02時24分発行